

後期：現代聖書学の諸問題

オリエンテーション

1. 創造論
2. 一神教
3. 契約思想
4. 神殿神学・知恵文学
5. 預言
6. 研究発表：侯
7. 研究発表：張
8. 研究発表：南
9. 研究発表：齋藤
10. 研究発表：金、岡田
11. 研究発表：山下
12. 終末論・史的イエス
13. イエスの譬え 1/18
14. 初期キリスト教と女性 1/25
15. パウロと政治神学 → 火曜日の「聖書演習」へ

<前回>近代聖書学の成立とその諸原理、そして帰結（前期）

1. 知・人間的現実の地平としての歴史（歴史化）→歴史主義・歴史的思惟
2. 近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想（研究）＝近代聖書学の成立
シュライアマハー、シュトラウス、パウロとテュービンゲン学派
3. 近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学
言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など
4. トレルチ：「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感覚」「真の近代的歴史」
「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的事象間に生ずる連関がそれである。」(10)、「蓋然性の判断」(10)
「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」(11)、「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの事象が他のものと関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」(12)
5. パネンベルク
方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造
6. イエス研究をめぐる
・パネンベルク「聖書原理の危機」（1963年の講演）
「イエスの歴史と使徒たちのキリスト教使信との関連を視野から失ってしまった。」(14)
「事実と意味、史実とケリュグマ、イエスの歴史とそれに関する新約聖書の多様な証言、これらの間に断絶があることが現代の神学の問題状況の一方の面の特徴となっている。」(15)
7. 19世紀におけるイエス伝研究とその挫折（A. シュヴァイツァーの総括）
懐疑主義
8. ブルトマン『イエス』（未来社）

「イエスの「人となり」に就いての興味も排除されている」(12)、「私個人としては、イエスは自分をメシアと考えなかったという意見である」、「それは結局のところ、この問題については確かな事は何も言えないからではなく、むしろこの問題は副次的な事柄だと思うからである。」(13)、「その意志したところは、実際、一連のまとまった命題や思想として、教説としてしか再現され得ない」、「このものは事実ただイエスの教説としてのみ捉えられ得るのである。」(14)、「その「教説」、その宣教なのである」、「実際さしあたりは教団の宣教なのである」(16)、「伝承の最古の層の中にある思想の複合体が私達の叙述の対象だからである。」(17)

9. 伝承史：イエス→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集

- ・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判）
- ・編集者の意図の解明（編集批判）

10. イエスと癒し

・ P. テイリッヒ 『宗教と心理学の対話 人間精神および健康の神学的意味』 教文館、2009年。

11. 悪霊に取りつかれたゲラサ人をいやす（マルコ）

- ・ 荒井献 『イエスのその時代』 岩波新書、1974年。
- ・ Marcus J. Borg, *Jesus in Contemporary Scholarship*, Trinity Press International, 1994.
Conflict, Holiness and Politics in the Teaching of Jesus, Trinity Press, 1984.
- ・ John Dominic Crossan: クロッサン 『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』 新教出版社)

11. ポイント → 医療人類学

- ・ 疾病 (disease) : 身体的、心的
と病 (illness) : 精神的・宗教的を含む全人格的態度、複数の次元が複合的に関与する
- ・ 奇跡は物理的現実である前に社会的現実である

1 2 : 終末論と史的イエス

(1) 近代聖書学における「神の国」論

1. キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心的な関心を占めてきた。→歴史的イエスの探求、「神の国」「終末論」の問題。
2. 「イエス研究／終末論」の変遷：「神の国」が常に議論の中心に位置してきた。
 - 1) 19世紀：近代聖書学の確立期、イエス伝研究、市民社会の倫理の教師イエス
 - 2) 19世紀末～20世紀初頭：黙示的終末論の再発見→古代の黙示的終末論の宗教家イエス「イエス伝研究」の挫折、ナザレのイエスと信仰のキリストとの分裂
 - 3) 20世紀聖書学のパラダイムの浸透：弁証法神学、モルトマンやパネンベルク
歴史研究としての聖書学の後退とそれに対する批判（ブルトマン学派）
 - 4) 1980年代以降：20世紀の聖書学のパラダイムの崩壊と新しいイエス探究、黙示的終末思想に基づく宗教者イエスという理解の相対化、知恵の教師イエス。

(2) 神の国の宗教運動 → 隠喩としての「神の国」

3. 新約聖書学→仮説・蓋然性における結論（伝承史を逆に辿る）
伝承史と二資料仮説
イエスの伝記的事項については大まかなことしか言えない（福音書は伝記ではない）
→ イエスの教えについてかなりの蓋然性で言えること
4. イエスの福音
 - ① 「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）
 - ② 「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、

らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マルコ 10:24b ~ 25）

5. 「神の国」の宣教（新しい契約の実現）
国（バシレイア）：神の制定した秩序（支配） cf. 国家機構、王国
6. 神の秩序 ↔ この世の秩序（古い秩序） = 罪（ハマルティア）
階層性・二分法・対立 的はずれ cf. 規則の侵害
関係の歪み（神関係、自己関係、他者関係）
7. 神の秩序の実現 = 古い秩序の転換 = 罪の解決 = 救済 → 福音
↓
イエスの宗教運動：巡回・共同生活／論争・教え／奇跡行為（病の癒し）
8. 平等な開かれた食卓としての救い：
人間としての自己肯定可能な共同体内に自分の居場所を見出すこと = 意味の回復
断片的実現と未完成な全体、神の国は生成途上にある。

（3）イエスと終末

9. 終末論の類型：預言者的、黙示的 → 意味の拡張
10. イエス時代の通常の「神の国」理解：預言者的終末論、黙示的終末論
↓
イエス運動における「神の国」の意味の転換 = 隠喩化
善人が入ることができる神の国 → 罪人が招かれる神の国
11. 終末：善悪の最終的決着の時・罪の問題の最終的解決 = 歴史（創造から終末）の完成
→ 神との完全な関係の実現・本来的な人間性、正義の実現
12. 宇宙的ヴィジョン（ドラマ化） → 罪と悪に対する勝利、ハルマゲドン
1) ヘレニズム的な文化環境への適応
2) 民族宗教の再建 → 普遍化：預言者、知恵
黙示文学：ダニエル書、エズラ書、ヨハネ黙示録（アポカリプシス）
13. 迫害・抵抗文学 → 象徴、暗号
獣、「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」
14. 善と悪の最終的戦いと善の勝利（ハルマゲドン）：
1) 善悪二元論 2) 秘密の隠された知恵
3) 終末・時の切迫の実感 → 迫害下の教会への励まし（最後まで耐え忍ぶ者は幸いである、命の書）
4) 宇宙論的劇的イメージ → 民族の枠組みの克服、宇宙論的メシア
15. 黙示文学の影響：千年王国論（終末時のキリストの千年支配、黙示録 20:2-6）
16. 知恵の教師イエス：慣習的知恵（既存の秩序肯定）、転換的知恵（既存の秩序転換）
17. 知恵から終末論へ：人間性の回復される現実をもたらす知恵

（4）「神の国」の思想的意義——イエスの平等主義——

18. イエス時代のユダヤ社会・地中海世界（この世）：典型的なしかも極端な不平等社会
富める者／貧しい者、男／女、大人／子供、自由人／奴隷、ローマ市民／非ローマ人
浄い人・義人／不浄な人・罪人
19. 「罪」 = 「的外れ」 = 「関係の歪み」（人間関係が歪んでしまっていること）
人間存在（個人／社会） = 関係存在（神関係、自己関係、他者関係）
20. 食卓としての「神の国」。誰と食卓を囲むのか、囲みたいのか。
21. 開かれた共食における神の国：イエスの宗教運動において現実化しつつあった「神の国」は、イエス運動の食卓を見る限り、罪人と食事を共にするというあり方として確認

できる。階層的な社会秩序と関係の歪みに対する徹底的な平等主義である。

23. 理念と現実の緊張・対立（ずれ） → キリスト教の動的展開

「神の国は近づいた」、未だ生成途上にある。

24. 宇宙論的問題設定、宇宙的キリスト、あるいは拡張された神の家族の射程

25. エコロジー神学にとっての「神の国」・終末論

<聖書引用>

1. ヨハネ黙示録 1 章

「1 イエス・キリストの黙示。この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためキリストにお与えになり、そして、キリストがその天使を送って僕ヨハネにお伝えになったものである。2 ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証しした。3 この預言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。時が迫っているからである。」

2. マルコ 13 章

14 「憎むべき破壊者が立つてはならない所に立つのを見たら・・・読者は悟れ・・・、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。15 屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入 ってはならない。16 畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。17 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。18 このことが冬に起こらないように、祈りなさい。19 それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。20 主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。

3. ヨハネ黙示論 20 章

1 わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降って来るのを見た。2 この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、3 底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである。4 わたしはまた、多くの座を見た。その上には座座っている者たちがおり、彼らには裁くことが許されていた。わたしはまた、イエスの証しと神の言葉のために、首をはねられた者たちの魂を見た。この者たちは、あの獣もその像も拝まず、額や手に獣の刻印を受けなかった。彼らは生き返って、キリストと共に千年の間統治した。5 その他の死者は、千年たつまで生き返らなかった。これが第一の復活である。6 第一の復活にあずかる者は、幸いな者、聖なる者である。この者たちに対して、第二の死は何の力もない。彼らは神とキリストの祭司となって、千年の間キリストと共に統治する。7 この千年が終わると、サタンはその牢から解放され、8 地上の四方にいる諸国の民、ゴグとマゴグを惑わそうとして出て行き、彼らを集めて戦わせようとする。その数は海の砂のように多い。

<参考文献>

1. ボーグ 『イエス・ルネサンス』教文館。
2. クロッサン 『イエス——あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。
3. 荒井 献 『イエスとその時代』岩波新書
4. 田川建三 『イエスという男』三一書房。
5. 大木英夫 『終末論』紀伊國屋新書。
6. 芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社。